

○研究あれこれ

躍り出た被差別民—天正17年7月、奈良町の風流—

藤 田 和 義

天正 17 (1589) 年 7 月 8 日、奈良の町は祝祭にわいていた。群集の注目のなかを奈良町の各郷民の手によって美しく飾り立てられた人形が引かれてゆく一賞賛の声、驚嘆の叫び。

興福寺多聞院の院主英俊が書き記した『多聞院日記』からこの日各郷が出した作り物の数々を紹介してみる。

たとえば、歴史物語や謡曲などに取材したと思われる、源平合戦で有名な那須与一、楊貴妃に笛を教える唐の玄宗皇帝、平敦盛を討つ熊谷直実、吉野から落ちのびる源義経などがある。あるいは、華やかな京の町や、京の公家の蹴鞠の会のようなすをかたどったもの、えびすや大黒などの福神を人形に仕立てたものもあった。こうした作り物を競作したのは餅飯殿郷、角振新屋郷、高島郷、中市郷、城戸郷など奈良町の各郷と、春日社の社家・禰宜衆及び興福寺寺門で、いずれも「金・銀・唐・日本ノ宝物」を贅沢に使ったものばかりであったという。その華麗さは、「不及言慮処也」一言葉も考えも及ばないほどであった—このように記して英俊は感動をあらわしている。

人びとが競って作り物を出し、あるいはうちそろって笛や太鼓ではやしながら躍り歩く—中世に盛んとなったこうした集団芸能を当時の人びとは風流と呼んだ。

この年 6 月から奈良の町では興福寺の築地塀の修築が行われていた。多くの郷民が工事に従事するなか、7 月初旬に修築は一応完成し、8 日にこの風流が執り行われたのである。翌 9 日も風流は続き、奈良町内外から多くの見物人が訪れ、春日若宮御祭以上のにぎわいとなったという。一乗院・大乘院の両門跡、天正 13 (1585) 年から大和郡山城主として大和・紀伊・和泉三か国を治めていた豊臣秀長も見物の客のなかにいたともいわれている。

ところで、この風流のことは別の史料にも記録されていた。東大寺に残されていた「寺辺之記」(東大寺薬師院文書・東大寺図書館蔵)である。

興福寺中サタ十間造リモノアリ、次卅間野田高

島祢宜衆サタツクリ物田楽、次日小原木九女、次五間ハ唱門衆、次五間ハ夙ノモノ通小町、次五間ハ穢多

これによると、「興福寺寺中」や「野田高島祢宜ノ衆」に続き、「唱門衆」「夙ノモノ」「穢多」も作り物を出して風流に加わっていたというのである。

「唱門衆」「夙ノモノ」とは、慶祝・占いの他諸芸能にたずさわった人びとである。「穢多」は後年の被差別部落に連なる人びとのことであると考えてよいであろう。つまり、この風流には被差別民であったと考えられる人びとも参加していたのである。

こうした人びとは、これまでややもすれば地域社会から疎外されていたと考えられてきた。しかし、この史料にみるように、奈良町を熱気の渦に巻き込んだ風流のなかに、他の郷と趣向を競って作り物を出していたのである。

地域社会にある確かな位置を占めながら、しかし同時に被差別民でもあった—ここに私たちの社会がいまだ克服できない差別の問題を解く鍵がひそんでいるように思われる。

熱気のなかを風流の列は続く。人びとのどよめきが高まる。各郷や寺門、「唱門衆」「夙ノモノ」「穢多」が出した作り物に熱狂する人びとのなかに、どのような心性が醸し出されたのであろうか。中世から近世への時代の転換のなか、人びとはどのような社会を望んでいたのであろうか。

(史料センター調査研究員)